

吉村 和真 よしむら かずま

京都精華大学 副学長 マンガ学部学部長 教授
国際マンガ研究センター長



経歴

1971年、福岡県生まれ。
熊本大学大学院修士課程修了、立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員を経て、現在は京都精華大学副学長、マンガ学部学部長教授。国際マンガ研究センター長。研究者として著作・論文を多数執筆するかたわら、2001年の日本マンガ学会設立や、2006年の京都国際マンガミュージアムの設立に尽力し、また大学などにおける漫画関連の企画展の立案や運営に携わるなど、マンガ研究の中心人物の一人として知られる。

子どもの頃から慣れ親しんでいるマンガ。
このマンガの表現を通じて、私たちが知らず知らずのうちにすり込まれているイメージや価値観があることに気づくとともに、マンガと偏見の関わりについて考えます。



講演：差別と向き合うマンガたち ～メガネ男子や大食漢がヒーローになれないのは、なぜ？～

マンガは私たちの身の回りにあふれています。本屋やコンビニで売っているものだけでなく、新古書店やマンガ喫茶、床屋や食堂などにも、手垢や油にまみれたマンガが置いてあります。

いったい、いつごろ、どのようにして、こんな環境ができたのでしょうか。また、私たちは、絵本やアニメを含め、幼い頃から「マンガ的世界」に接しています。現代日本に住んでいれば、アンパンマンやドラえもんとは出会わずに小学生になることはほぼ不可能でしょう。はたして、その過程で、私たちにどんな思想や価値観、感性が身に付くのでしょうか。

マンガに潜む『偏見』を知ることで差別について考えてみましょう

マンガの登場人物には、さまざまなステレオタイプや偏見が潜んでいます。石ノ森章太郎さんの作品「サイボーグ009」を例に挙げてみますと 背の低い料理人の中国人や寡黙で大柄なアメリカ先住民に対し、西洋人はスマートに描かれていて、人種に対するイメージが特徴的に表現されているのです。また、「めがねをかけている人」は「賢い」、「標準的体形で標準語を話す人」が「ヒーロー」など、作品を読まなくても役回りがわかるほど、気づかないうちにイメージが刷り込まれているのです。マンガは性質上、誇張や省略は避けられませんが、現実とは固定化されたイメージ通りではありません。マンガに潜むステレオタイプや偏見について、一緒に考えてみましょう

<他の講演テーマ>

「はだしのゲンが伝えたいこと」原爆投下で家族を失いながらもたくましく生きる少年ゲンの姿を描いた漫画「はだしのゲン」。少年ゲンは一体何を私たちに伝えようとしてきたのか。そして「ゲン」閲覧制限問題は何を意味するものなのか。平和の大切さ、平和教育のありかたをマンガから考える

<主な著書>

『差別と向き合うマンガたち』（共著）
『マンガの教科書—マンガの歴史がわかる60話—』（編著）

<主なメディア出演/ラジオ/新聞>

NHK 第一放送『かんさい土曜ほっとタイム』内「まんが博物館」
朝日新聞コラム『みんなのマンガ学』毎週木曜日夕刊掲載
NHK 大阪 「旬の人時の人」、NHK 全国放送 「ラジオ深夜便」など

